うめかえ

次第 きこえぬたよりも風なき便づく

下 浮遊の男いつかはわかぬ世

サシ こゝに移る鎌倉亀が江谷人丸とや

女ながらも我が父悪七兵衛

景清は平家の味方なるにより

源氏にうとまれ日向國宮崎と

かや母なかりせば年月を経る

舞ふなれどいふこともなくたぬれち
はしり出る手も旅なしひ
みなかとんほよく思ひ旅の
涙かたしく夜の花露をそへて
いとしなまだ枝りな都國を
立出てゝ旅にかはり思を近江
にほのうみとはえる猿舟巻こ河に

渡しは八橋のぜゝ井のかりたゝり梅
うまの駅路になきてみせく
やゝく御急ぎなくかごと袖い
りや日向國宮崎とやま由来
ゆきはゞ見てなこその浜べの末越
浪路あてうわはるまでは松門
ひとまも山ちま年月を経るまで

がんせんのしら清光我にてらす時の
縁なきもまれにもへずゞ晴にゐ
蒼室にいさ流しい紙つむわれ
寒草にあらんさまはずさる庵に
けうこそ法の山おちを請へたか
迎への我もすくと影つ大ゆくしゞ小
ちうづくつむへき袖の法揃や

やすらはんと笛宿翁をなつまる
ぬしの思ひの方をなきりあきて
あり難き此身我ちやう禍ひよしも
聞しくかしき庵を見かな
草此庵のわか家ぢ旅寝へつくもみて
さらはゞ爵めぬふりやゆはれ
がし気安の有るときのしけ軒端し

遠く見えたるや〽嫁きぬと
月はさやのふみえ秋風の
なとは達い隔ちとも〽去りぬ
まよひ濁なりなを拭ざまし
風になつ霜もなし〽実三界は
所なしたゞ一空の見ぞ達とよ
さし籠としりむすめこい伝ち

とりこふつき〽いかにこの
わら屋の内へ物とはう〽それも
いかなる者ぞ〽なりさる旅人哀
行ゑや知らぬ〽流されし人に
とわれても名字をは何と申さう
〽平家の侍悪七兵衛景清と申しは
〽実左様の人なを遠成てらん也

ぶよわ宵月なきは見ぬ事なし
下カル 、一一一一一一二二二上二、
さもあさましき北は宵様なりか
こ一一、、一一一一一一、
ぢうに語りかはりし折をもちかは
、、一一、一二、、、、二、
なわだりしき事なほ申まて
、、、こ、 上も 、、、
御たまはらん ＼揃い此あたわ
まて悦盛取りるよはご様よわ
わく趣浅出て召申つ様らん

三詞
＼不思議座ふ昨今の老をいつり隙
老ろとおりひてらへ大此宵月
那るもおそ子まそは老をうふ
我一座居強國熟田まて遊女と
あひなまひとわ乃子哉まうく
女子あまきは河の男まに流へ送
ぞとも思ひば鎮倉聴りえふ座流乃

長き歌をまさしのだゞぬ親子を
りなし見ゞす其のほどに言葉哉
かちくれ我ざおけと西影を
見ぬ盲目ぞの歌し多なら宮
ひあし心ちりなり〳〵おや哀
おはなゝ旅く〳〵いかにこの
あたりに里人のわたり候ふ

里人とはなにの御用にて候ふ
なりさる旅人の行ゑや知らるゝは
流されし旅人ことゝ里ともいつの様識
人を御尋ね候か　平家の侍
悪七兵衛景清をたづね候
唯今こゝへ流されあまたり候
山陰のわら屋の内に人は人気

きわめ候よ〽それまて屋まは
盲目なる乞食ありつるはいの清き
〽おふそれこそもなふなる乞食ならう
候義人景清ならあるふしきや
景清乃事を申てはへ大あまり
那乃清古と孫ほ継傷のなしき
又しまひて見ゆと申候

御入りまゐらせ〽ほ不審也
まそいは何を仰候へ申候へ参
ばいい景清の息女にて渡り候
が一度なこゝ清對面あり度由
仰候へ人ひて見まゐりるく
御下向まゐらせても御ほ手に
從ろへきやうに仰し候はひて

景清ハ引合申さう程に頭を上られ候へ
言語道断さてハ景清の候息女
まし候坐たりずまた清心を志津
めさるおもしめさきわへ景清免
両眼盲ましく／＼てさ無さ
なをかりの乃々伐お詞しは向の
勾當とゐを保よさきのひ殿を候

拝人を百の刃ぞ御ゆくとなの
老のあり拝刃伐もゆ候方殿を
候保よ人りず肴にひ妻のへさ候
候百拝を配申さ拝てげゐのわ
な妻と拝堂申て々ず来候ハ御付
申景清と呼申庵し家ゐなりた
ここよ庵しず其附清常面あ津て

昔ゆかりの御物語りハこゝに座
渡りけんなかなか景清乃ゆかりや
ゆかりぞ悪七兵衛景清の渡りよ人り
三下詞 りしましく さなよ　うば故に
乃もあらそ飛ー を比しな
なまし候力を兩てなあらて帰す
かうし さしぞ 下ル 手行の也淚たもと哉

詞 、、、あらたし弱事ハ 簑あうら老
何とし男なわ此おさめそうだかハ
此世小な貴物と思ひきわさ候
元なを悪七兵衛景清なんとく
どうはこ郎こそうこふへき上ルこの
上カル ぞれ上りの弘あ比国乃 ね向
とは日小むりゆく向ひこ笛

あをは呼路りて力なく揺し
棹さす舟の人湊をさして漕
ぐ心を、さし急へともみ
腹立や問はれぬ先のうく
法性持たぬさく小さま狭
中将なりは極まめくゝ蓑杖を
えしなみ小町る庵しげさ之

成方の寄せとし給ひし何しく
よしなきゆひことたゝゆゝし
おりし月ともろ月もろ闇と
月ゝそゝ恋秋人乃思なく
一念ちる小車も袖を出ぞ
松風ばかり雲よみぬむ乃きせ浪
葛の葉もさよ梅み浦ハ葦縁よ

ーーニ、ーーーーーーーーニニ下、
よしや浪もさゝゆふへの塩も
ーー、ーー、ー、ーー、上元ニ、ニ下、ニ
さしやかま、流石に我も平家也
ニニニ、ーー、ニ三、ニ、、
物語りしめても御慰を申さん

三下詞
いまやはだしてたちかへりにけり
事滞りて短世哉やては情免
あつ悔いるかつは

三下詞
いやく
いはも滞るうらみ雑日くれ

うしろがまし我本よわいは前よ
景清を尋ねたる人に問くはり

三下
いやく情ならよわ深りふ顕しは
人気なくは

上
あつる備を他人や
まぎらうのききしに浜の女と
行く称名いて清たちしはし
物をばとて清はしなれ名残よ

は痛しきに花を見ても傍中ては
なふなふこゝ御覧西らん　女詞　なふ
見渡りしきる花を参わすらん
眠めしやりく我花はうら
雨風霜を志のきて栄ゆる留
ちらさらしもいとゞさかりに成
うらめし庭梅は親乃植置しも

子によわれ庭のやなきなや
かくとはいそしりんめく心思しよ
親きけるり露乃身流置所なや
りけるし庭御身は花の姿まで
親子と御京并ふなくたゞさらとに
我独もおりける庭しとおりひ
きわけし心こすなるを家を眠と

思ふなよ敵乃よいかりしへ共
うとふりとなきとんりとて
恨ミらし涙乃雨と乾ひよ亡き共
子小ヲ小えとは秋しいおもふ
出しさるよ一つ乃ふ事なれうち
一門の身柄うちに肩哉なりへ
ひきをかうそ所をかへ世月落

羨清ハ達ふわも流座舟うり
なく宿ひの名ふまし一敵の下
武蔵様ゝ小多恩様とぞ哉とりよ
かち浪ふ事にも乃世ぞ流へいく
なりまし共たちうらやま秋
有りし男哀きわむも老ぬまきハ
暮馬よ荏と瀬のちとなきなわ

早詞
あらいたはしし庵先かゝう渡りまゐらせ候へ
げにや景清に申候御対面のこそ
候所望の人　三詞 何事にて候ふぞ
八島にて景清乃高名の様を
や君様ハ我よし語りて聞かせ候へと
候物語を御なかまの勢申て候へ
是迄はなまとやしきの似合ぬ所望

事行く此景にて来りて候
ことさら候はれは不便なりは雅小
語りなきをも庵し只物語をも候
は老哉の如く候への庵し宮
語りもうへ　半 何事にて候物語
こそりて庵の方へ庵し申さう
候ふそは　三下物語 去程にやさうは

掛紙

承さ候てききの給うけるこそは
いでそれ此は寿永三年三月
下旬のことなりしに平家この
源氏は陸両陣を海岸のおほ津に
まず勝負を人はせをせしかば寸
上カル
続小ぶさ旗鐘乃たまの小様だる
須磨の若木やさ梅中孫の人候路

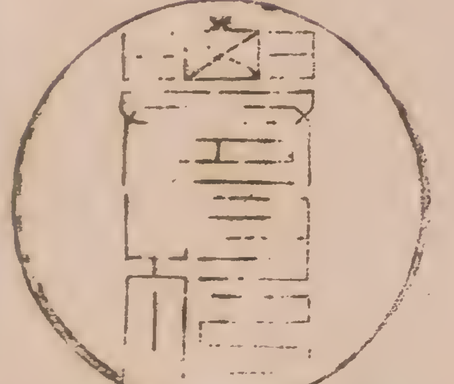
ひえとわさらしりいさ候ままへ
一度も味方乃理なり候し事
びょうぶりさ旗鐘りそうわきこと
いろしおにふ候そあらわりけるも
しそ九郎殿いたわりかくこと
きりあらまほしぞ見苑へえ
のききよさらし候にありやや

詞

東家なまじゐとて鬼神までも
おそれはこそ家を捨て座候のみ
なき世おもひ数限りなき宮殿の
雕気随ありある稀代源氏乃名
あまりにまし とそのよせのふ
京清く桜を見そへぐもおよく
しやかはしあふねうけまでうきも濃
ひとめかひてさはてかくまで
こころはそれがしをひなるやい
四方へりらにうりとの風
乃ゆきし見せすふし風
うきくよく源平たかひに
ひろめもかりしこ人をとめ世
子息安世乃うち抱ご主義小

うひさせてだまりし与兵衛の
さらふひ悪七兵衛景清と名乗
う巻しくよとまりしきせしゝ
なうて捨てぞん浄瑠座りきたれ
れ甲斐志ゝ梅をとわたし
麻りたし二三度入り巻乃ひ
しかともおもふ男さ抱なきは

のうそし坂ひりし里甲を
出麻ゑいや坂了離まし梅ハ
きまそゞ郎こ母とま振なさ兵
さ景へ日巻乃ひぬゞ梅うすし
逢ゝそて、ま海里をぬまとも
ぬおり縁しやう家乃たよりき坂
いひ京清はぞん浄瑠座り

頭のかしらより流るゝ瀧と楽しみ
左右へのきにしは菩恵まぬ
物語りと語らはさてこそ語らん
気色差別や聞かし是世八
とてもいはなと我が物の行きさ
すなはちしげりや右の道をかね
あと我とまつひあきの人有月礼

勝きところ儀とりしひありけ
あるりし悦遊世通ずるよ
とまる遊くろとの路一ある我
きて残すこ秘すぞ親子譲るへん
なるく